



短歌は短い文学

会員 飯田 義則 (23期)

五七五七七の定型詩である短歌は、驚くべき長い歴史を有する和歌の一体を成す。その集大成が、現存最古の万葉集である。大伴家持の編集による、とされている。

ところで、僕自身、何時頃から短歌に興味を持つようになったのか、確固たる証左はない。ただ、鹿児島市で戦災に遭遇し、疎開した山村の中学で、健康保険法の施行に当たって、当時の厚生省が、標語を募集したのに応募して、賞を得て、全校生徒の前で表彰されたことがあった。その標語は、「健康保険に入って 追い出せ 病氣と貧苦」だった。もちろんこれは、短歌とは関係ないが、短歌を好きになる片鱗を有するものと、言えないこともない。

とにかく、文学が好きで、日本の文豪の作品ばかりでなく、ドストエフスキー、トルストイ、サマセット・モーム、ニーチェ、ゲーテ等、世界の名だたる文豪の作品を、ほとんど読んだ。

これらの吸収が、僕の短歌の源泉となっているのかも知れない。でも、最も影響を受けたのは、石川啄木であろう。

青年の頃、土屋文明先生に憧れて、今は廃刊となった「アララギ」の同人となって、各短歌集に、何首か採ってもらっていたが、直接御指導を受けたわけではなく、2、3回お話を聞いたと、記憶しているに過ぎない。よって、特定の師に付いているわけでもないの、下手の横好きの域を出ない。

しかし、司法修習生の頃から、年賀状や暑中見舞いに、必ず自作の短歌を載せて、依頼者や親しい方々に出してきた。これが現在も継続している。理由は二つある。一つは「先生の短歌に感動しました。」という手紙や電話がきたり、あるいは持参していただけるからである。他は、自然を愛するからである。春夏秋冬、花鳥風月を、明白に知ることの可能な日本に生まれ



て幸せと思う。

さて、本題に入って、僕の詠んだ歌を、限られた紙数の範囲内で披露したい。詠んだ日時と時代背景は、異なる場合のあることをお断りしておく。

初めてのデートの如く君は今 はにかみながらコーヒーを飲む

家内は、今のような肝っ玉母さんではなく、47kg位でとても可愛く、初々しかった。昭和40年代当時、有楽町に本社のある一流企業に勤めていたが、僕はたまに彼女を呼び出して、日比谷公園で二人で手作りの弁当を食べ、その後決まってコーヒーを飲んだ。

還暦を過ぎて想うは君のこと 若き日君に助けられしこと

前述したように、三文文士に憧れて生活していた僕を助けてくれたのが、畏友の酒田の本間次睦君だった。

子らからの届きし花を前にして 妻の笑顔はひまわりの花

還暦を過ぎたる妻よ山形の 娘の電話に笑い転げる

公園の桜が庭に舞い来たり 妻生誕を祝うごとくに

若い頃は、ほとんど家庭をかえりみず、長女長男の世話を家内に任せきりで業務に勤しんでいた。還暦を過ぎた頃から家内の貢献に感謝するようになった。